

グループ夢分析による学部生ゼミ教育の試みについて

藪添 隆一
(学校臨床心理)

760-8522 高松市幸町 1-1 香川大学教育学部

A Test Project of the Undergraduate Seminar using the Group Analysis of Dreams

Ryuichi Yabuzoe

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要 旨 本研究は、夢分析をゼミ指導の方法として採用し、健康な学生グループの相互作用と交流を支えにして、個々人が自己実現に向かうことを目指した実践研究である。学生の夢分析では、まず自分自身の心の傷や課題に気が付く(病識を得る)。次に、傷や課題の根底にまで心を掘り下げていく(タナトスの退行)。心の最深部で魂と出会う(死と再生)。新たな自己形成に向かう(エロースの発現)。というドラマが見事に展開する。このことを例証した。

キーワード グループ夢分析 タナトス エロース たましい イニシエーション

1 はじめに

「プロカウンセラーの夢分析」(東山2002)に次のような文章がある。

「マレー半島に住むセノイ族は、みんな仲がよく、ストレスが少ないわけがありました。セノイの人々は、朝食のときに、自分の見た夢をみんなに語る習慣があったのです。たとえば、子どもが魔物に追われる怖い夢を見たしましょう。大人たちはそれをじっと聞いてやったあと、今度その魔物を見たときには、われわれがついていてやるから、じっくりと魔物の正体を見て、朝、それを報告するとよい。というような助言をしてあげるのです。一族の長老たちは、夢の理解にたけていますので、とても適切なアドバイスができるのです。」

これは実は、この本の著者の作り話であると種明かししてから、東山は次のように続けて書いている。

「現実にもしセノイのような部族が存在し、夢を語る習慣があったとしたら、この部族の精神衛生がよいことはたしかでしょう。」「夢はまず見ることに第一の意味がありますが、それを語ることによってその意味を増し、夢のメッセージが読み取れると、人生が変わるほどの影響をもたらす」というのである。これを学生グループの中で行うことは、どのような意味を持つのか。セノイ族のように、その学生グループがよい精神衛生を得ることができるのだろうか。そもそも、学生はどのような夢を見ているのか、などについて、実践の結果をとおして考察したい。

2 方法

大学3年生から4年生卒業まで、毎週90分のゼミでグループ夢分析を実施する。

ゼミ生として初めて研究室に集合した3年生に「このゼミで聴いてほしい夢を見て、記録して持ってきてください。夢を見た日付、時刻もつけて持参すること」と教示する。

各人は毎週のゼミに来室した際、自分の見た「夢」の記録をメンバーの人数分コピーして配り、一人15分ずつ発表する。主として筆者が公開面接の様に聴く。ひととおりに聞き終えた時点でメンバーからの質問、感想を受ける。

ただし、夢は見ようとしても見ない場合がある。また、発表したくない夢もあるだろう。だから夢を持ってくることについて強制はしない。メンバーの自由を保障すると、夢の発表の代わりに、メンバーの前で15分箱庭を置くことも始まった。あるいは、希望によって筆者が公開カウンセリングをおこなう。しかし、どれもしたくない場合は、他のメンバーの面接を聴くだけでもよい。

以上を学期の授業として継続的に実施する。したがって、夏季休業中は「休み」としたが、夏休み中に学生から「あまり長く休むと夢がつまって心の便秘になります。」とのメールがあり、急ぎよ予定を変更して「登校日」を3週間に1回程度設けることにした。

また、筆者の都合、学生の都合（実習、就職活動等）で日程を変更する場合もできるだけ代講日を設けて実施し、「便秘」対策とした。

さて本論では4人の夢を採りあげることにする。グループダイナミクスを考察するためには全員の夢と相互交流のからみを省察しなければならないだろうが、本論ではそこまでの論究は避け、学生個々人の夢の様相とその意味を採りあげて吟味し、これを共有することの意義を確かめることに重きをおくことにする。夢分析は心理療法の歴史の中で育ってきたので、病的な状態の人と治療者の二者関係によるものとされている。しかし、あえてこれを健康な学生グループの教育に適用すれば深い相互交流と

自己理解、他者理解、人格の成長が期待できるであろうとの仮説を実証する実践の一部を報告することを目指すことにする。

3 経緯と内容

私の担当するゼミは平成18年度当初、3年生4人で始まった。3年生になると学生が卒論指導教員を選ぶための授業（集会）が開かれる。指導教員も全員集合し、各教員の座っている場所に希望する学生が自主的に分かれる。

私は新入教員で、学生たちとは初対面だった。したがって、私は一応の自己紹介を試みたものの学生は皆、他の教員に分かれて一人取り残されてしまった。司会の主任が、「藪添先生のところへ行く者はないか？穴場かもしれないぞ！」と促し、同情の視線に晒されてしまった。仕方なさそうに「行ってみるかな」と目配せし合ってパラパラと寄ってきたのが、この4人だった。

次いで私の授業で夢を語り、研究室にやって来て身の上話をしたことのあるA子が加わり5人となり、後日4年生のB子が夢分析を勉強したいと入ってきて6人目になった。

一年間が経過し、年度の締めくくりにカウンセリングワークショップをやろうと小豆島で合宿することになった。一泊二日のうち二日目の午後には観光した。車を二台連ねて壺井栄原作「二十四の瞳」の舞台となった小学校舎に出かけた。

島の分教場跡、木造校舎が海辺にあり、映画のロケ跡だということで映画村として観光スポットとなっている。私には小学生時代を思い出させる木造校舎であるが学生たちにはめずらしい遺跡なのだと改めて気がついた。と同時に、島の分教場に赴任した若い「おなご先生」と12人の子どもたちが繰り広げた物語が、珍しげに校舎跡を観光している9人の物語と重なって見えてきたのである。この夢分析に明け暮れたゼミの経緯は、現代では非常にめずらしい物語ではなかったのだろうかと思いついた。

小豆島の岬で彼らは木造校舎を珍しげに観光

していたが、私のゼミに彼らが観たのもめずらしい経験だったと思うのである。

「先生、お誕生日おめでとうございます。いったい先生が何歳になったのか全く想像もつきませんが、おめでとうございます。3年のゼミ決めの時、先生がどんな人かわからなかったで、先生のゼミ生となるのは一種の冒険だったけど、冒険してよかったと感じる今日この頃です。先生は今まで会ってきた先生の中で群を抜いていちばんよくわからない先生です。(良い意味で)というか、本当に不思議な先生です。いつもお世話になっています。あと1年、このゼミでさらに自分についての発見をしていきたいと思います。(C子)」

彼らはメンバーの誕生日会を次々に行っていた。それはどれも親密感あふれる催しで、手作りのプレゼントが例外なく用意されていた。まさか教員の私にも誕生日会があるとは思っても掛けなかったが、ある日、なにやら研究室に向かう私を足止めさせて部屋の鍵だけ借りていくので、その時点では察しがついたが、メンバー一人ひとりが心づくしの惣菜を下宿や自宅で料理して持参し、馬が好きで競走馬の一口馬主(株主)になっている私の愛馬の頭部をデザインし職人につくらせたケーキまで用意され、「夢」と大書し、シャガール風の絵(競走中の人馬のシルエット)が描かれたジグソーパズルとその裏に寄せ書きした各人のメッセージはうれしかった。

上記C子のメッセージは、その寄せ書きの中にあつたものである。「よくわからない先生」「本当に不思議な先生」とはよく言ったものである。私は私のことを本当にそう思っている。「私は誰?」と常に思っている。「先生とは何?」と昔から思い続けているからである。

そのような不可解さに形を与え、自信を抱かせる要素とは、まさしく「夢」なのではないだろうか。夜見る夢(dream)と愛馬に賭ける夢(vision)は、共に「人生の意味(meaning)」を付与してくれる。夜にみた夢を語り会える仲間、お互いの関係の意味と自分自身との関係の意味(identity)をポジティブに確認し合う

ことのできる仲間となる。その一人ひとりがこの世に生まれた記念日を祝いたくなる現象が発生していたのだと思う。

「お誕生日おめでとうございます!人との出会いで人を変えるってどこを目の当たりにして先生の偉大さに驚くばかりです。これからもよろしくお願いします。また飲みに行きましょー!!!(D男)」

D男は夢を見るのが苦手で、長編小説風の夢や連続物風の夢を見てくるメンバーに劣等感を募らせていた。「みんなは親の夢をみるじゃないですか。僕はみないっす。親が居るのに夢に出てこないのは変ですか?」ときいてから、次の週に「親の夢、見ました!」とうれしそうに報告するのを聴けば、

D男の夢1

電話が鳴った。電話に出ると父だった。父はいきなり「たまには家に帰ってこんか!」と怒鳴って電話を切った。

という夢で、「どんなふうにも分析できませんか?」と言う。

「なんで家に帰らないの?」と私。「うーん」とD男は考え込んだ。

秋になってD男は夢も希望もなくなってしまった。原因はわからないと言う。変に焦るばかりで何もできずに苦しんでいた。将来、自分が何をしたらいいか、特にどんな仕事に向いているのかわからないと言った。

私は、何もしたくなくなって仕事を辞めて非現実の世界に入っていく男が主人公の小説「ねじまき鳥クロニクル」(村上春樹 1995)を読んでみないか、と奨めた。かなりの長編である。しかも現実的で健康なD男が読むかどうかわからなかった。ところが、この難解な長編をD男は数日で読破したのだった。何をしても小説を手放さずに読みふける姿、本を読みながら授業を受け、学食で食べるD男の姿をメンバーが目撃していた。

「孤独は悪に門戸を開く」(東山 前掲書)を具体化したような主人公の運命が展開する。

「悪」に妻をさらわれ取り戻そうとして彼は深い涸れた井戸に降りていく。地底の暗闇で時空を超えた世界に進入して帰還する。D男は夢で地下に潜入できはしなかったが小説世界で時空を超えて、孤独の向こう側の愛しい生命に出会うことができたのかもしれない。

「次は何を読んだらいいですか？」とD男はおかわりを要求した。私は本棚から「深夜特急」(沢木耕太郎 1986)を貸した。「ねじまき鳥クロニクル」が垂直に地下へ潜ることで非現実世界に行くフィクションなのに比べて、「深夜特急」は路線バスを乗り継いで東京からロンドンへと水平方向に移動する旅行記である。

本の扉に沢木は次の言葉を記している。

「ミッドナイト・エクスプレスとは、トルコの刑務所に入れられた外国人受刑者たちの間の隠語である。脱獄することを、ミッドナイト・エクスプレスに乗る、と言ったのだ。」

横浜国大を卒業後、就職した会社を一日でやめた沢木は、フリーの文筆家となる。丸の内に出勤するホワイトカラーの群れからきびすを返して「脱獄」し、ユーラシア大陸の旅に出かける。乗り合いバスを乗り継いでデリーからパリに行くことができるか否かの賭けで友だちから集めた金を持って文明からも脱獄を図ったのだった。しかし、行き先はロンドンであるから、沢木の脱獄は「自分を縛る現代文明」からのものであって、旅で成長すれば縛られない自分を手に入れることができるかも知れないという賭けであったのだ。まさしく彼は最初の訪問地マカオで賭博バカラに嵌りこみ危うく破産しかけるが運良く危機を脱する。このことから彼の旅がイニシエーションであることがわかる。

D男はこの膨大な紀行文と共に旅に出かけ1週間で読破してしまった。百年の夢を一瞬に见ることができるよう、彼は一週間でユーラシアを横断してしまった。

そして、D男は11月14日に次の夢をみた。

D男の夢2

海を青くする夢。

海の精霊みたいのと一緒に、海にもぐる。

この精霊は、まだ赤ちゃん。

海にもぐって宝箱を探して、開けると、海が少し青くなる。それと共に精霊も大きくなる。最初なかなか大変だったがコツをつかむと一気に、宝箱を見つけることができた。

そして、精霊が大きくなると、お礼を言って旅立つ。すると、また違う赤ちゃんの精霊が出てきて、また宝箱を探しに行く。

春休みになって、D男は就職活動に忙しく顔を見せない。「どこに就職したいのだろうD男は」とつぶやくと「JRAです」とE男が教えてくれた。

D男とE男は仲がいい。D男はE男につられてゼミにやって来たようだった。誕生会を企画し始めたのもE男だったし、正規ゼミ生以外のギャラリーを連れてきたのもE男だった。E男は私に陽性転移してしまっていたから、あちこちで「ゾエゼミ」(私の名字の添を引いてきて学生たちが銘々した。)を自慢するので、他所のゼミ生たちが見学や個人面接を希望し始めた。ところが、D男が宝の箱を開けては海を青くし始めてからE男の落ち込みが始まったようだ。ゼミの論文試験でD男が皆を感激させる答案を書いて「秀」をとったこともきっかけとなったようだった。小豆島のワークショップで、自分がとことん受け身の人間だと気がついたことを機に「勉強が嫌いなんです。大学院へ行って心理士になるつもりが無くなってしまいました。」と、春休みの帰省先から面接を予約して研究室に入るなり、そう言った。「何もやる気が起こりません。父は大学院に行った方がいいと言うのですが、僕は就職して働きたいんです。先生はどう思いますか。」

<大学院に行く気が起こらなくなった。就職して働きたい>「はい」<何もやる気がない、というのは大学院へ進むことに関してだけで、就職はやる気がある>「あっ。そう言うことです。」

E男の夢1

家族でテーブルを囲んでいた。父が「ご飯は

まずそうに食べたら追い出す」的なことを言った。母がご飯を持ってきたが、白ご飯におかずは1つしかなかった。案の定おかずはすぐになくなり、ペース配分をまちがった。ご飯が半分くらい残して、それはすごくまずく感じた。妹が先に食べ終わって席を立つと同時に「まず!!」と言ったのを聞くと、すごくやる気がなくなり、ダラーとしたら父に「まずそうに食うなら出て行け!」と言われ、頑張っ

て食べた。E男には大学1年と高校2年の妹がいる。二人は夢によく登場する。自分も含めて3人兄妹なので、夢記には「中の妹・下の妹」と区別してE男は書くのだが、ここでは単に「妹」とだけ記している。妹は母に遠慮がない。父親にはもっとない。父は母に気遣い、まずそうな食方をE男には許さない。妹は「まず!」と言ってはばかりず、E男はやる気がなくなる。女組に去勢されてダラーとなるのだが、父の叱咤には頑張るのだ。男組二人の上下関係に従うときは頑張れるのだ。

E男の夢2

真ん中の妹と母親が同時に死んだ。

葬式があったが、私と父親と西川史子（女医タレント）は3人で前の家にいた。

私が気を紛らわすために寝転がって漫画を読んでいると、父が後ろから足でつついてちょっかいを出してきた。最初は無視していたが、あまりにしつこいので、ものすごくキレて飛びかかった。父親も逆ギレして取っ組み合いになり、西川は止めに入ろうとする。

父親が「こんな時に、もめても仕方ないだろ」というので、私は「こんな時とかじゃなくて、ちょっかい出したことを反省しろや!」と言うと、父親は黙って何も言わなくなった。

そのとき、妹と母親の遺影や花を持った親戚たちが部屋に入ってきて祭壇の設置を始めた。入ってきたのを見た瞬間に涙が止まらなくなった。

「ママンが死んだ」はカミュ「異邦人」冒頭の有名な書き出しである。母の死は自失をもた

らし、自失が存在を危うくする。存在とはなにかが「異邦人」のテーマである。E男の家族の女二人が死ぬとどうなるのか。さっそく女医でタレントの女が家の前に来ている。父は子どもっぽくちょっかいを出してきて父息子の子どものほい取っ組み合いになる。息子の方が大人っぽく父を叱る。葬儀が始まる。涙が止まらなくなる。存在の支えは肉親の女たちだった。

E男はD男と男同士の二人組をつくり、「野球同好会」と称して大学のグラウンドでキャッチボールしたり、二人で同じレストランのアルバイトをして過ごしてきた。このレストランに私も行ったことがあるが、一階の高級ステーキハウスは初老夫婦が、二階イタリアンはその息子と数人の男性スタッフで、皆凛々しく男組のタテ関係を形成していた。家族（女組）から離れて元気になり、大学の野球仲間で作る気が出た。バイト先の男組に入って2年が過ぎ、ゾエ組づくりに励んで3年生が過ぎようとしていた。

E男の父親は勤め人であるので、息子は家にいる父しか見ていない。不安になるときには父に頼るくせに女組の前で無力な共生感は覚えるものの尊敬できない感じを覚えてイライラしている。

E男の夢3

近くのおばの家から祖父の家に何か見てはいけないものを見に行くことになった。祖父の家だったが、タイムスリップしたみたいに古い感じで亡くなった祖母がいた。入るとそこは台湾で、海へ行き、船に乗って蟹をとるということだった。現地スタッフに蟹はかなり大きいから注意するように言われた。傾斜が急でよく滑りそうな崖に着き、着けてあった船に何とか乗った。

長時間経ったが全然とれないので、帰ろうかなと思ったとき、突然網にかかり、船に飛び乗ってきた。かなり大きく、ものすごい暴れて切れ味抜群のハサミで網を切って、こちらにも攻撃してきたが、私は無事だった。蟹は暴れた末、海へ逃げ（というか落ち）遠くでイルカのように跳ねた（背景は夕日）。船から下り、帰

りの車の中でスタッフがその蟹を使った料理を出してくれた。

父方の「お婆の家」から「祖父の家」に「何か見てはいけないものを見に行くことになった。」が、その祖父の家で「タイムスリップしたみたいに」時間的に過去に遡ったところに「祖母がいた。」と語り出される。

いつかE男と話していたときに、E男が祖父の代のことを意外に知らないことに驚いた。父の勤め先までは流石に知っていたが、まだ元気なお爺さんがどんな仕事をしていたのかを聞いたことがないとE男は言い、我がことながら不可思議な顔つきをしたのだった。「おじいちゃんの家に行って聞いてきます。たずねていけば喜ぶし。」とE男は言い、数週間後に、「祖父は婿養子でした。知らなかったなあ」と報告したのだった。「何か見てはいけないもの」とは父方の家のコンプレクスだろう。と同時にE男自身のコンプレクスなのかもしれない。

コンプレクスを見に行く旅は、桃太郎の鬼退治を連想させるような夢として描かれる。鬼ならぬ大蟹は切れ味抜群のハサミで攻撃してくる。ハサミ、切断、去勢と連想すれば「去勢される恐怖と闘い」のテーマが見て取れる。危うく難を免れた。海に逃げた蟹は遠くの海上に跳ね上がる。夕日を背景に蟹が跳ねている図はカニ缶詰の絵とそっくりだったという。帰りの車でそのカニを食う。コンプレクスはまだまだ残るだろうが、とにかくカニを食うことができたのは成長の証だろう。

B子はただ一人の4年生で、夢分析を勉強したいと後から入ってきた。その成果は卒業論文「親密性の獲得についての研究」としてまとめられた。論文では「共依存」がテーマの基軸となっている。B子は膨大な量の夢を見ては報告したが、論文では一つの夢も採りあげていない。しかしテーマ「共依存」の背景は夢によく顕れていた。

B子の夢1

実家のベランダで虹の写メールを撮っていたらN（君）に出会う。（Nも虹の写メールを撮ろうとしていた。）せっかくだから夜ご飯を食べに行こうという話になる。

私は年の離れた妹がいる男の人になっている。両親が離婚し、父親側に付いていく。妹を守ろうとして、妹も連れて行く。気が付いたら自分は父親の再婚相手になっていて、新しい生活用品や服を選んでいる。服を選びながら、娘からのプレゼントとしてあげられたらよかったのに・・・と思う。

Nは同年代の男友だちで、虹を仲立ちにディナーに行こうということとなり年相応の夢（ロマン）を感じさせる。ところが夢は暗転し、両親の離婚、父親との結婚生活となる。近親相姦的な暗いイメージ、「共依存的夫婦生活」の雰囲気漂うが、「もしも私が男ならお父さんに喜んでもらえただろうに、女の子で悪かったね。せめて結婚してあげることぐらいはできないけれど」といった気持ちが働いているのかもしれない。しかし、救いは「服を選びながら、娘からのプレゼントとしてあげられたらよかったのに」との娘心が息づいているところにある。この娘心を生かしてくれている要素は、「私」が最初、「男」であったという点と「妹」を守ろうとして連れて行く点である。妹の存在が彼女の初々しさを保持していて、彼女の男性性も「守り」の要素として息づいているようなのだ。

B子の夢2

タイトル「オリバーツイストのカムパネルラが出てこないヤツ」

オリバーはすごく小さな男の子で、問題児。言葉がわからないのではとされている。でも本当はわからないふりをしているだけ。人間ではない「よそ者」と言われている髪の毛長い（青い）女の人を連れ回している。女の方はひざをついて歩いている。人間より小さい。周りの人は小ばかにしてお似合いだねと言う。オリバーは女の人が泣いて嫌がるのに真っ暗で汚いトイレに閉じこめる。途中まで（いじめを）すごく楽し

んでいるが、途中ですごく謝りながら（トイレから）出す（ママ）。その後、暗いバラの並木道を歩く。ものすごいスピードで滑り出す。向こうからレーサーのようなのが何台も走ってきて、ぶつからないように避けて走る。道のはずれまできて「本当はレーサーになりたいんだ」と女の人に話し「あの集団に入れてもらおう」と言う。女の人には「性欲処理係になればイイ。すごい人気になるよ」と言う。女の方は乗り気でなく、とにかく教会に帰ることになる。

これから良くないほうに話が流れる予感がして、場面が変わった。

ドイツの国際平和村にいる。明日帰国。

ここでも共依存的男女が描かれる。すごく小さな男の子オリバーと「人間ではない」青い女である。オリバーは女を虐待し辱めて楽しむ。「性欲処理係になればイイ」とオリバーは言うが、B子の、男に性を提供しないとてないのではないかとの自信の無さを感じる。かすかな救いを感じられる点は「女の方は乗り気でなく」という部分である。＜夢1＞では「妹」が、この＜夢2＞では、「青い女」が救いの要素、マゾヒズムに対するアンチテーゼを感じさせる。教会に帰ることになる。しかし、まだ良くないほうに話が流れそうになるのでドイツの国際平和村に場面を転じて「明日帰国」とハッピーエンドに持って行くあたりには無理を感じる。まだまだ真の平和は訪れていない状態を示している。

B子の夢3

母さんに五人目の子どもが生まれる。

姉・本人・弟・妹の4人きょうだいなので五人目とは新しい可能性が生まれたことを感じさせる。

B子の夢4

再会のために沖縄に行く。自分の家の二階で結婚式をあげる。自分の結婚式だったはずなのだが、相手が誰かもわからず、気付いたら式は

終わっていた。

新しい可能性を産むための結婚式をあげるが相手がわからない。

B子の夢5

ソープでバイトすることになり、部屋に入るとおじさんが3人いて話しかけてくる。怖くなって、おじさん達にすぐ戻りますと言って部屋から出て受付のおばさんに頼み込んで辞めさせてもらう。

何かの組織に追われ、トイレに追い詰められる。換気扇か何かの穴から出ようとするが逃げられない。人がいなくなって隣の部屋に行くと窓があり、そこから逃げる。いつのまにか自分は男になっていて、そのうち羽の生えた妖怪になる。自分よりひとまわり身体が小さなピンク色の女の子の妖怪と逃げる。

「ソープでバイト」は夢2「性欲処理係になればイイ」からつながるテーマである。これは夢4「相手が誰かもわからず」ともつながっている。自分が結婚すべき相手がわからないことは、結婚するにふさわしい自分がわからないことに拠るのである。夢1で「離婚した父の再婚相手になっている自分」とは、「両親の離婚」つまり不和のイメージから結婚すべき自己のイメージが引き裂かれたということが推察される。

「何かの組織」とは漠然とした悪の組織だが、これに追われて「逃げている」ことが暗い過去から明るい将来への逃走を感じさせる。いつのまにか自分は男になっている。次に妖怪となっている。妖怪はあの世とこの世の中間にいる、人間と幽霊の中間的な化け物である。水木しげるのゲゲゲの鬼太郎は「たましい」であり、妖怪達はたましいを守りながらあの世のパワーを人間界にもたらす働きをする。引き裂かれた心から生じた孤独と悪から逃れるパワーはたましいそのものに成ることで得られた。女のたましい「アニムス」(男)になり、次いで妖怪(たましい)に変身し悪から逃走するのだ。

しかもこの逃走には「身体が小さなピンクの女の子の妖怪」が伴走している。夢1の「妹」、夢2の「青い女」、夢3「五人目のこども(きょうだい)」が今回はピンクの妖怪女の子になったのだとみれば、女としての再生に導く少女のたましいとして観ることができるだろう。

以上のような夢をみながら、B子は卒業論文「親密性の獲得についての研究」を書いていた。

B子の夢に登場し、共依存的状況を忌避することを促し、逃走に伴走する小さな女の子は親密性の化身とも呼べるだろう。

A子はゼミに後から入ってきた。発達心理学のゼミに籍を置きながら、ギャラリーとして仲間に入っていたが、それは私の授業で夢分析を経験したからだった。そして予測されたことだったが後期から移籍してきた。

私はA子のゼミ指導教授に移籍させてもいいか伺いを立てたのだったが、教授は彼女の卒業論文テーマからしても移る方がいいだろうと賛成してくれた。そのテーマとは「傷んだ死体を美しく整える仕事、エンバーミング(embalming)の意義について」だった。

A子は筆者の授業で、「今年の春先に亡くなった祖父が夢枕に立ち、その瞬間うれしく、夢だったとわかると寂しい。毎晩それが繰り返されていて疲れる」と語った。亡霊が現れても怖くないのかとの質問は出なかった。学生達は、A子の残念さに深く打たれたようだった。

筆者は同居していた祖父の死が残念なことは理解したが、その気持ちの強さに普通ではないものを感じていた。後で聞けば、A子は幼児の時に母が病死し、同居していた父方祖父母に養育されてきたのだという。父親、祖父母、兄、兄嫁の家族の中で祖父を失い、さらに年老いた祖母の面倒を見ながら家事の役を担う立場に立たされている。育ての親である祖父の死が心に納まっていない状況が残っていた。A子に言わせると、死体を美しく整える仕事は遺族の悲しみを癒す大切な臨床だということである。服喪のための研究をしたいというわけだった。

A子の服喪は祖父の死よりもずっと以前から

続いてきていた。いっしょにお風呂に入っていた雰囲気しか記憶にない母の死。小学校時代の、可愛がってくれていた叔父の死。高校時代の友人の死。と数々の死別が重なって、自分も若いうちに死ぬ運命にあると本気で信じていたのだった。だからせめて死にゆく人との別れをする人たちのために、あるいはあの世に去っていかねばならない人たちのために美しい死顔に復元する仕事について研究したい。さらにその職業に就きたいと願っていた。

A子の夢1

ビル八階に住んでいる(私、祖母、叔母)
祖父の死因を究明したいと考えている(私)

ピストルで撃ち合いをしているが、私は案外、撃たれず傷一つ無い(ビルにいる知らない人たちVS私)

医者が診察している(同じビルの同じ階に医院がある)。祖父の遺体が運ばれてきて、祖父の死因解明のための診察がはじまる。途中から祖父が動きはじめる。

ニコニコしてよくしゃべるのは生きていたときそのまま。診察が終わり、結局死因はわからなかったが祖父は歩いてビルの二階の教室まで帰っていく。私は八階から、二階の渡り廊下を歩いていく祖父に「おじいちゃんまた会おうね」と叫ぶ(死後の診察まで終わってしまったのもうなかなか会えないという寂しさから)。そのときは祖父は振り返らない。その後すぐ祖父が教室から出てまたこちらへ向かってくるのが見える。

お昼なのでカレーの入ったナベを手を持っている。私たちと一緒に食べようとしていて、とても嬉しそう。私たち(私、祖母、叔母)は、生きていたころの祖父と違って臭いがする、肌の色が変化しているなどの祖父の変化に戸惑う。

食べ物を食べるには衛生面の問題があると思うので一緒にお昼ご飯を食べるのを断ることにする。祖父には本当の理由は言わず、うまく説得して二階に帰らせる。

祖父は落ち込んだ様子は見せず、ニコニコし

たまま帰っていったけれど私はすごくつらかった。

A子が祖父の死を納得し、祖父と共に生きたいと願うことをあきらめた夢である。

夢で死臭を感じてしまったことには重要な意義を感じる。嗅覚という身体感覚で死を受け止めざるを得なかったのだ。

A子の夢2

家族の誰かが狙われている。犯人I（シャーロックホームズ風のスマートな人物。現実には思い当たる人はいない。）の存在は家族みんなが知っていて、怖がっている。Iは私の家族ではない誰かを殺そうとした殺人未遂の罪で逮捕される。死刑。

死刑が執行されたので私たちは安心して暮らしていたが、忘れた頃にまた犯人Iに出会う。以前と髪型が違うし、もう死刑が執行されているので、私以外の家族はIに気付いていない。今知り合ったと思って笑顔で挨拶を交わしている。

なぜかまたIの死刑が執行される。

みんなで裁判所に行き、死刑執行の知らせを受け取って帰る。

私の家ではなく隣のいとこの家へ向かう。

いとこの家で、みんなついに自由になったとお祝いする。

私は車の中で目を覚ます（裁判所からの帰りに車の中で眠ってしまっていた）。

いとこの家の中でみんなが宴会しているのが車内から見える。

ふと隣の我が家を見ると、我が家の仏壇のところに犯人Iが見える（物色している）。

なぜまだ生きているの？と混乱する。

Iがいとこや私の家族の歓声に気づけば、いとこの家に乗り込んでいってみんなを殺すかも知れないし、その前に駐車場に止まっている車の中に私が居ることに気づくと私が殺されるかも知れないと思うととても怖く感じた。

近い人、親しい人が次々と亡くなっていく

と、死に神のような殺人者に狙われ続けている感じがする。死に神は死刑にしても消えてくれない。ただA子の夢に出てきた殺人者は愛する家族や隣に住むいとこ一家を狙い続けているばかりかA子を殺しに来るかもしれないのだ。ここに恐怖が芽生える。死に神は死への恐怖をもたらしたのだ。生きたい、死にたくないとA子は実感できてきた。聞けば34歳に自分が死ぬ定めだと子供の時から当然のように思い込んでいたという。また、3歳から慢性的に続いていた全身の痛みが最近無くなっていることに気が付いたという。母の死と痛みを引き受けてきたための痛みだろう。それが取れて変な感じがしている。生きた心地を味わうのに慣れていないのだ。

A子の箱庭（筆者の筆記記録より）

左手前から右奥に向かってレールのない電車道が通っていて、電車が右奥の駅に向かっていく。駅は終点である。駅の横におじいちゃんが出迎えるようにこちらを向いて立っている。後ろの家にはおじさんやお母さんもいる。あの世の平和な世界である。

亡くなった祖父が平和に暮らしている。亡き叔父、そして母もやすらかな様子であった。夢の後のA子の話を聞きながら私もメンバーもあの箱庭を思い出していた。服喪が果たされるとは、死者からの自立、死者との新たな関係の始まりを意味するのではないだろうか。

C子は、「先生は今まで会ってきた先生の中で群を抜いていちばんよくわからない先生です」と誕生祝いの寄せ書きに書いてくれた。C子の方も私にとっては「いちばんよくわからない」ゼミ生だったと言える。それはC子が「わかられたくない」事情を隠すように夢を見ていたからかも知れない。そのことが最近、次第にわかってきた。C子本人も自分のことが次第にわかってきたようだ。つまり、わかられたくない事情がわかってくるにしたがってC子は隠さない人に成長してきたのだと思う。

C子の夢1

実家地元にある久住山が、なぜか家の裏山で、それが急に噴火して車で逃げる。途中、噴煙に巻かれて前が見えなくなりそうになる。関所みたいな所があって、そこでは歌詞を見ずにカラオケで70点以上取らないと先へ進めない。係員が私の歌を入力ミスして歌えなくなり文句を言う。(場面は変わって)家にたどり着いてニュースを見ていたら、私が行っていた高校がある地域が噴火し壊滅的だとわかる。噴火騒動に紛れて、お母さんのふりをした化け猫とかが家の中に入ってこようとする。

災難からの逃避行の途上に前途が見えなくなる家族。噴火騒動に紛れて、お母さんに化けた化け猫が入ってこようとする家。化け猫に化かされない知恵が必要と思われる。

この家族とともに生きていくためには知恵がある。そのためにも点数を70点以上取らねばならない。70点は合格ラインだ。その「私」の力を係員が入力ミスして私は文句を言っている。係員とは教員か？私がC子を買いかぶっていると非難されていたのかもしれない。

C子の夢2

地元の小学校の校庭にいて、男の子の友だちと腕相撲したり、先生と皆で何か話したりする。長机を運ぶとき、女の子の友だちとけんかするけど仲直り。

砲丸(投げ)選手の室伏さん似のガタイのいい男の人がいて、家の存続のためという理由で4人くらいの男の人から殴られている。でも、本領発揮で4人をバシッと叩くと4人とも気分が悪くなりどこかへ行く。私は室伏さん似の人とこの家を出ようとするけれど、門のところまで室伏さん似に何らかの質問をされる。その質問には必ず嘘の答えをしないといけないので嘘の答えを言うと、家を出ようとしたスタート地点に戻ってしまう。それを2~3回繰り返す。

高松で夜道を歩いていたら「またね」とE男君が自転車を通り過ぎる。家に着くと入り口のところにD男君がいる。2人は私の家の隣に住

んでいた。D男君は鍵が合わず自分の部屋に入れない。私の家に2人を招待したら、玄関でD男君がなぜか水の種類を聞いてくる。

小学生の頃は無邪気に、男女の区別も無く遊んでいた。顔もハンサムで体も逞しい男性と家を出ようとする。家の存続のためにあえて殴られることも平気な強さを持った男性なのだが、彼の質問に必ず嘘で答えなければならないことになっている。だから、嘘の答えを言うのだが、その度に家に逆戻りして家から出ることが出来ない。「本当のこと」は言えないのだろうか。本当のことを言うとなぜだめなのだろうか？

ゼミの男性2人を自分の部屋に入れることになるが、D男は「水の種類」を聞いてくる。「水が合わない」かどうか心配なのだろうか。夢を見ているC子が、実家から離れた自分の部屋においても、異性に「水を疑われないか」と心配している。

C子の夢3

小学校の校庭にいて、私は以前、自分で植えたキュウリ畑を見ている。校庭の向こうでは野球の練習をしている。私はキュウリが育ってくれるのがうれしいが、土が乾いているので「枯れそう」と思っていると、地面から水が湧いてくるし、雨も降ってくる。私は畑の手入れにとりかかる。

小学校時代に戻ると子どもの心が戻る。生きるエネルギーが復活する。

土が乾いていて、育てているキュウリが「枯れそう」と思っていると、地面から水が湧くし雨も降ってくるのは天からも地からも守られている感覚から生じることだと思う。

ある日あることで失敗した彼女が「私にはこういう事態がよくあって、でも2度目は必ず決める女なんで、それを信じて頑張ります」と言ったことがあった。最後の救済が自然からの恵みとしてイメージできることは一種の宗教性なのかもしれない。

C子の夢4

私は、もう一度、善通寺へ行こうと、夕方リヤカーを押しながら境内へ入る。石段とかあるのでリヤカーを持ち上げながら下りていると、男の子が手を洗う所を探しに石段を下りる。しばらく下りると、手が洗えそうな水路があって、男の子はそこで手を洗うが何か物を落とす。「大丈夫？」と言うと「大丈夫」と言う。

少し男の子と話していると、向こうに子どもが生まれそうな牛がいて、男の子のおじさんが世話をしている。男の子も手伝いに行くけど、私は遠くから見ている。近づいていくと、子牛が生まれ、母牛がぐったりとしているので、頭とかその周辺をなでると、母牛は気持ちよさそうに目をつむる。おじさんが「母牛をここに置いてはだめだ」と言うので、小さな入れ物に入れて木陰に持って行くと、母牛は小さな黒い塊になってしまう。おじさんは「死んだな」と言うけど、「そこら辺の母牛の欠片を集めれば生き返るかもしれん」と言うので、私は男の子と一緒に母牛の欠片らしいものを手ですくっては入れ物にいれていく。

「もう一度善通寺へ行こうとする」ところから夢は始まる。以前に善通寺へ行った時はいつなのだろう。「もう一度」とは、「あきらめずに」「念押しに」などの意志が感じられる。リヤカーは何を運ぶためのものか？リヤカーには何か積んでいるのか。リヤカーは巷では見かけなくなったが、C子が日常的に見ているはずのリヤカーなら私も見かけることの多いあのリヤカーだと気が付いた。大学構内の清掃業者が使うリヤカーで、広いキャンパスを浄めるためのものである。「清掃」「労働」「業」「修行」「作務」「浄め」のためのアイテムとして夢ではこれを押して宗教的な時空に入っていく。更に無意識の底へ下りていくと、男の子と出会う。夢では「(私が)下りていると、男の子が手を洗う所を探しに石段を下りる」と記述されていて、「私」の下りる姿と男の子の下りる姿が融合するように重なって描かれている。男の子は何歳くらいなのだろうか？

男の子は「手を洗うところ」を探している。水路で手を洗うとき男の子は「もの」を落としてしまう。「大丈夫?」「大丈夫」との会話が後に続くが、落とした物とは「もののけ」の、「もののあはれ」の、「ものがなしい」の「もの」のような気がする。つまり「はっきりと規定できない」心なのである。浄めと同時に、なにかが落ちたのだ。憑きものが落ちたのかもしれない。

難産で死んだ母牛を生き返らせようと、男の子と協力する。大きな母牛が小さな黒い塊になってしまう。大きな母がちっぽけなものになってしまい死んでしまうのだった。老人の知恵に従って、男の子と母牛の欠片を手ですくって入れものに入れていく。憑きものが落ち、魂が再生の作業を始めたように感じた。

4 たましいの恢復・・・結語に代えて・・・

グループ夢分析は一種のグループ・エンカウンターである。通常グループ・エンカウンターが言語を媒介とするコミュニケーションに依っているのに比べて、グループ夢分析は夢を仲立ちとしているに過ぎない。夢を仲立ちとして相互理解を深めていくと「セノイ族」のように仲良くなるとともにストレスが少なくなる。生きづらくなるほどのストレスは、孤独・不可解・不審・空虚・憎悪・自己嫌悪・恐れ、などからもたらされる。それが軽減するのは、共生感・理解・信頼・現実感・友愛・自信がわいてくるからである。

ではなぜそれら肯定的な感覚や関係が生じるのか？現代教育の最も課題とされていて実現困難な「生きる力」をグループ夢分析が生み出すのはなぜか。

人は人に触れて元気になる。もちろん、触れる相手にもよるが、好きな人とは、握手するだけでも元気になれる。心的エネルギー、身体的エネルギーが湧き起こる。心の触れ合いは癒しと元気回復が発生する。「カウンセリングはなぜ効くのか」で氏原(1997)は、カウンセリングはカウンセラーとクライアントの交わりであ

り、交わると人はエネルギーを発生させる、だから「カウンセリングは効く」のだと書いている。

魂と身体が密接につながっていることを河合隼雄（1989）は指摘しているが、「魂レベル」での交流においては、深い共感を伴う親密性が発生する。その近道が夢分析ではないだろうか。しかも、それがグループ力動の中で起これば、グループは生きる力を生み出す教育の「場」であると言えるのではないだろうか。この「教育」は人格の陶冶を促すと言っても過言ではないだろう。

魂と身体をつなかりをA子は教えてくれた。痛みは心の最深部で起きていた。心の最深部とは、心の層を地層のようにイメージすれば、最も底の層は地層のできてきた歴史の最も初期に形成されたであろう部分であり、A子の幼児期の心の部分として見るができる。それがA子の魂の層なのであるが、魂の層が形成されているときにA子の母は病気で亡くなっている。筆者はA子の慢性的な身体の痛みを本人から聞いて知った時は、A子本人も自分の痛みが無くなっていることに気が付いた時だった。それはA子の学部生時代が終わりに近づいたころだった。それまで本人は病識が希薄だったようである。「私は34歳で死ぬ」と小さい時から思い込んでいたのと、全身の痛みを感じていたこととは慢性的なものであり、本人にとっては当たり前のことだった。

「私以外の人は、体がいつも痛いというようなこと、ないですよ」とA子は確認した。そして、最近「これが普通のことなんでしょうけれど」痛みが消えつつあるようだと私に言ったのだった。たぶん、無痛の状態に慣れていないので言うに言えない違和感が生じて筆者に相談しようと思ったようだった。

<痛みが無いのに慣れていないから変な感じ?>

「これは変じゃなくて、今までが変だったんです」とA子は答えた。先述のとおり、A子は母の苦痛を自分の体で引き受けていたのだと思う。「34歳に死ぬ」のも母の寿命以上は生きてはいけないと幼心で感じたからではないだろ

うか。

A子の話を聴いている時、筆者は「ねじまき鳥クロニクル」（前掲書）に描かれている「加納クレタ」という女性を思い出していた。常に体のどこかが痛んでいるクレタは死のうとして失敗する。そして痛みの消え去っている自分の体に気が付く。

「私はとりあえずもう少し生きてみようかと思いました。私には興味があったのです。痛みのない人生というのがどういふものか、私は少しでもいいから味わって見たかったです。死ぬことはいつでもできます。」

A子も生きてみようと思うことができるようになってきた。痛みが無くなったから生きようと思うのか、生きようと思うから痛みが消えたのか。とにかく確かなのは、深くわかりあえる仲間ができたことにより、生きることが楽しくなったということだった。

死への衝動（タナトス）から生きる方向性（エロース）への転換は夢に現れる。それは劇的であり、詩的である。

D男の夢2では「精霊」が海に潜り、宝箱を見つけて宝箱のふたを開けると海が青くなる。その瞬間、精霊が成長する。すると、また次の精霊の赤ちゃんが現れて同じプロセスを通して成長する。青い海がさらに青くなっていく、文字通り青年の心（海）の成長を描いたエロースの夢である。

E男は夢2で母と妹を亡くしている。母なるもの、母性的な守りを喪失して途方に暮れる。母性と女性に似て非なるものであり、女性の中に母性を感じられてこそ安心なのである。母性を喪失した女性は夢の中の西川女史のように非力である。それに比べて、台湾の海から釣り上げた大きな蟹は、母なるものの化身、グレートマザー（太母）だったかもしれない。女性抜きの母なるものは、大きなハサミで攻撃してくる。精神分析で言うところの去勢とはふつう父親によるものとされるが、ここでは息子の男性性をちょん切るグレートマザーと解釈できるだろう。そいつが海に逃げた後、蟹の缶詰のシールに描かれている図柄のように夕日をバックに

蟹が跳ねる。その蟹の料理を食べて目が覚める。食えたからよかった。男への道は困難極まりなく、エロスへの転換は命がけなのである。

B子は幼少期に父親恐怖を経験し、恐怖感が心の傷として残っていることをグループの中で語ってくれた。そのときメンバーは黙って聞くばかりで言葉も出なかったが、筆者は心の傷が夢を語ることによって風化し、生傷が古傷に、古傷がカサブタに覆われて癒えつつあると感じた。夢の中で、父を慕い、父にとっての良い娘とは何かを模索する様子は十分にわかっていた。それが、夢3「母さんに五人目の子どもが生まれる。」でエロスへの転換が始まったのだった。夢4では、生まれたばかりのはずのB子が結婚式を挙げている。生への希求こそ結婚への夢を発生させるのである。

C子の夢には宗教性が感じられるものが多い。それは、C子の兄に障害があり、兄の寿命が短いのではないだろうか、との不安があることと関連していると思われる。また、C子は親が齢を取って行けば自分が兄の世話をするとだといふところから決意しているという。タナトスに彩られた状況に生きていることをC子は夢1で自覚した。家族状況の苦しさで自覚は夢で強くなる。自覚はつらさ、寂しさを募らせる。しかし、悩み始めた時にはすでに成長が始まっている（河合 1990）のである。

夢2と夢3でエロスへの転換に必要なエネルギーと男性性（アニムス）を復活させてC子は夢4で「善通寺」に「もう一度」リヤカーを引いてやって来た。そこで浄化と死、再生の儀式を経験する。この儀式「母牛の再生」を共に行う「男の子」が現れる。女性の夢に現れて導く子供、特に男の子は魂そのもののイメージと言ってもよい。夢見者の可能性、分身、これからの人生を導くイメージであることが、女性の継続的な夢を聴いているとわかる。「たましいの臨床学」（角野 2001）では、夢の中に夢見者のたましいイメージが毎回の夢に登場して治癒の方向に導いてくれる事例が示されている。

C子は大学院の1次試験に落ち、落ち着きが

戻った時に空しくなる。人生の先が見えなくなってしまう。この先、試験を受けずに旅をしようと思っていると、次の夢をみた。

C子の夢5

遺跡（洞窟）の調査に行く。・・・中略・・・洞窟の中には、丸いガラス玉を何千何万とはめて並べた小山みたいなのが奥の上の方にあり、そこに女の子がいて「この中にもっと大きな神聖な玉がある」と言うが触らせてはくれない。というか近寄らせてくれない。私は洞窟に興味があったのでうろうろしていると、気付けばガラス玉がある小山の上の方にいて、さっきの女の子が私の手のひらに、その神聖な玉を他の小さなガラス玉といっしょにのせてくれる。私は神聖な玉だと聞いていたので「えっ、いいの?」と思う。その玉は、今までに見たことのないくらい美しい深い青色で、とても澄んだ色をしていた。神聖な玉を壊さないように注意を払っていたら、手のひらから他の小さな玉が滑り落ちる。

この夢を見た翌日、申し込んでいた他大学院入学試験を受ける代わりに島根を旅行する決意をする。1日目は出雲大社の大きなしめ縄を、2日目は鳥取砂丘を見たいと思う。原初の光景に触れた夢が現実の旅として行動化（acting out）することを促したのである。その証拠に、C子の旅行記は夢に近いレベルの経験に満ちていた。

C子の手記「出雲と私」から

<11月9日>島根には特急で行った。私は電車で乗り物酔いをするのはほとんどないのに、途中から気分が悪くなる。通り過ぎていく草が、窓ガラスに映った私の首を切っていくような感覚に襲われる。外の景色を見ながらこんなことを思ったことは今まで一度もない。

出雲大社では、参拝するよりも先に、行く予定ではなかった古代出雲歴史博物館に急遽行くことにした。・・・中略・・・その特別展のメイン展示であると思われるケージの中に、11月

7日の夢（夢5）で見た、神聖なガラス玉と同じ色をした勾玉を見つけた。私は驚いたからなのか、かなりの衝撃を受けて、意識しないと呼吸を忘れそうになった。出雲大社に行くはず、おみくじを引いた。・・・中略・・・私のおみくじは「信仰なき人は手綱なき馬なり」という言葉であった。なんだか、手当たり次第大学院や就職試験を受けようとしていた私の事のような気がした。

C子は受験という現実から脱出し、「深夜特急」（前掲書）のように旅に出る。「通り過ぎていく草が、列車の窓ガラスに映った私の首を切っていく」と「死」のイメージで気分が悪くなる。タナトスの旅は「たましい」の象徴、夢で手に入れた「神聖なたま」に出会う旅だった。「勾玉」との出会いは「意識しないと呼吸を忘れそうになった」ほどの衝撃をもたらす。

その瞬間、エロースへの転換が生じたのだろう。「おみくじ」を引くのだ。世俗的、現世のおみくじの文句が面白い。「信仰なき人は手綱なき馬なり」の「信仰」とは生への祈りと心の統合を意味する。「手綱なき馬」とは「狂い」に違いない。おみくじによって覚醒し、再生する。

C子の手記「出雲と私」から2

高松への帰途、車窓から瀬戸内海の夕日を見る。「何かが生まれるときは、こんな感じなんかな」と思い、ずっと凝視していた。我に返った時、この二日間は本当に現実だったのかどうかよくわからなかった。

C子の夢6（手記に記された11月11日の夢）

鏡を見ると、自分の顔も鏡になっていて、何も映っていない。

生まれたてのC子には、まだペルソナが無い。これからは自分らしい顔を自分でつくっていくのだ。

夢は体感さえ伴うこともある「経験」である。夢を分析するとは、製作者（夢見者）の前で、

よき鑑賞者となることである。それをグループの前で行えば、グループは「心の居場所」となっていく。C子がたましいと遭遇し、生命を回復することができたのも、夢を聴く指導者と仲間の支えがあったからこそであった。

参考文献

- 氏原寛. 1997. 「カウンセリングはなぜ効くのか」. 創元社.
- 角野善宏. 2001. 「たましいの臨床学」. 岩波書店.
- 河合隼雄. 1975. 「心理療法におけるイニシエーションの意義」. 『臨床心理学事例研究 京都大学教育学部心理教育相談室紀要2』
- 河合隼雄. 1989. 「明恵 夢を生きる」. 京都松柏社.
- 河合隼雄. 1990. 「こころの天気図」. 毎日新聞社.
- 東山紘久. 2002. 「プロカウンセラーの夢分析」. 創元社.
- 村上春樹. 1995. 「ねじまき鳥クロニクル」. 新潮社.
- 沢木耕太郎. 1986. 「深夜特急」. 新潮社.

謝辞

本論文を発表するにあたり、夢等の内的経験について記載することを許可して下さったゼミ卒業生の皆さんに感謝します。著者